

子ども学の ひろば



◇読者の皆様からご意見を頂きました◇

実践例や子どもについての記述など、保育や子どものことを考えている私自身にとっても、また、保育を学ぶ学生にとっても、とても読みやすく大事なことが学べる内容がたくさんあります。(40代大学等研究者)

保育の方法に偏った内容の雑誌が多い中、子どもを主軸に置き、さまざまな角度から丁寧に保育をとらえていく姿勢を賞いている、主張のある出版物だと思います。

(40代幼稚園教諭)

写真は多いが、イラストや図は少ない。保育は文章だけで語りきれないことも多いと思うので、イラストなど多用するとわかりやすいかなと思う時がある(著者にもよる)。

(40代幼稚園教諭)

幼児だけでなく、乳児のテーマもあると保育園やこれからの認定こども園の読者も増えるのではと思います。(40代保育所保育士)

いかに「効率」よく子どもを伸ばすか、いかに見目良く子どもが育っているように見せるかが、子どもを育てる者たちの意識になってきているように思います。(中略)時には、「遊ぶことの大切さ」「遊びの中で育つもの」「脳科学と遊び」など、科学的な視点の記事を載せていただけると、「見た目の育ち」を求める保護者の心に響く説明ができて、ありがたいです。

(50代幼稚園教諭)

ありがとうございました。今後の誌面作りの指針とさせていただきます。

皆様、『幼児の教育』へのご要望をお寄せください。

youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp まで。

本の紹介

『暴力はどこからきたか 人間性の起源を探る』
山極寿一 NHK ブックス 2007年

同種の動物同士の争いは、相手を抹殺することではなく、限りある資源(食物と交尾の対象)をめぐりにかに相手と共存するかを模索することであると著者は言い、霊長類の食と性をめぐる葛藤を眞に説きながら、人間社会に見られる争いについて拙速なく最終章最後半で言及していく。

「(今日の人間社会の暴力的な混乱状態から抜け出すには)人間のもつ能力をもっと活用することだ、と私は思う。人間の社会性を支えている根源的な特徴とは、育児の共同、食の公開と共食、インセストの禁止、対面コミュニケーション、第三者の仲裁、言語を用いた会話、音楽を通じた感情の共有、などである。霊長類から受け継ぎ、それを独自の形に発展させたこれらの能力を用いて、人類は分かち合う社会を作った。それは決して権力者を生み出さない共同体だったはずだ。われわれはもう一度この共同体から出発し、上からではなく、下から組み上げる社会を作っていく必要がある。」「人類は多産性を獲得して以来、共同で育児をすることを社会の中心に据えてきた。…育児に関する行動やコミュニケーションには文化の違いを超えて普遍的な特徴がいくつもある。それを利用して、人間はもう一度社会の和と力を取り戻すことができると私は思う。」

保育は、人を生かすこと・生きさせること(だけ)を思う営みである。殺すことの対極にある。この時代に生き、殺さないでほしい、人間の誇りや宗教心・信仰心を踏みつけるような言動もやめてほしい、と、ただそれだけをひたすらに願いつつ、長年、霊長類の社会的行動のフィールドワークを行ってきた著者の言葉をかみしめたい。(KT)